

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

特発性正常圧水頭症における アミロイド病理とアルツハイマー病

脳機能画像診断開発部 病態画像研究室

文堂 昌彦 室長

平成 25 年 7 月 11 日(木) 16 時 00 分～

第 1 研究棟 2 階会議室

特発性正常圧水頭症(iNPH)は脳脊髄液腔の拡大と共に歩行障害や認知障害を来たす疾患である。髄液シャント手術で症状の改善が期待できるが、くも膜下出血後の続発性正常圧水頭症とは異なり手術後も認知障害はある程度残存する。既に髄液貯留の軽減のみでは治療のできない不可逆的な脳実質障害が生じていることが示唆されるが、その脳実質障害を来たす一因としてアルツハイマー病理の可能性が考えられる。物忘れ外来でアルツハイマー病(AD)患者数を経験すると、iNPHの治療困難な認知障害にADの合併が関与しているのではないかと疑うのは自然なことであり、現在、iNPHの診療にあたる臨床医にとって、アルツハイマー病合併の実態は最も関心の高い話題である。

本研究は、iNPH診療ガイドラインにより probable iNPHと診断される症例群に対して、¹¹C-Pittsburgh compound B (¹¹C-PiB) PET および脳脊髄液バイオマーカー検査によってADに特徴的なアミロイド、タウの変化を調査し、iNPHとADとの疾患合併を検討し、臨床症状への影響を解明することを目的とする。

probable iNPH 42例の47.6%において¹¹C-PiB PETでアミロイド蓄積が認められた。脳脊髄液バイオマーカーでは、アミロイド β 42は低下、リン酸化タウは正常かやや低下していた。臨床症状ではアミロイド蓄積群で有意に重症であった。しかし、ADの合併によって悪化すると予測していた認知機能障害よりも、むしろ歩行機能への影響が顕著であった。

ADの病状はアミロイド蓄積、髄液アミロイドの低下から、タウの増加、神経脱落、臨床症状の発現という順に進行していくと考えられる。iNPHでのアミロイドの蓄積は髄液タウの増加を伴わない。これはADであればpreclinical stageに相当するが、アミロイド蓄積が歩行障害の悪化を伴うという点などがpreclinical ADの合併では説明が付きにくく、アミロイド蓄積陽性のiNPHとして独特な病態が存在している可能性が示唆される。

連絡先: 認知症先進医療開発センター
センター長 柳澤勝彦(内線 6500)